

初級段階における中国語発音の指導について

王 振宇・李 小捷

アブストラクト

本論文では、初級段階における中国語発音の問題点を子音、母音、声調の順で取り上げて考察した。本論文で使用したデータは、立命館アジア太平洋大学の中国語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの日本人学生に対するピンインの読み取り調査で得られたものである。データ分析の結果、次の諸点が明らかになった。まず、子音については、調音方法の習得状況を調査したところ、多くの被験者が有気音を習得したにも関わらず、有声無気音を用いて無声無気音を発音する現象が多いことが分かった。次に、母音については、モーラ言語の影響を受けて、鼻音韻尾を単独で分節する現象が一部の日本人学生の発音に観察されている。最後に、声調については、単母音と2音節語という2つの項目に分けて調査を行った。そこで明らかになったのは、1音節の発音は正確に発音できるようになっても、2音節語だと発音が不安定になることである。たとえば、単母音で高い正答率を得られた第二声は2音節語においては正答率が大幅に下がってしまった。

キーワード：中国語、発音、子音、母音、声調

1. はじめに

中国語学習の「初級段階」は日本中国語教育学会(2007)によると、大学における第二外国語で毎週2回(1回90分)、2年間を通じて学んだ場合の合計240時間の課程であるという。立命館アジア太平洋大学の場合、正課としての中国語の授業は週に4コマ(95分×4)である。したがって、同大学の中国語Ⅰから中国語Ⅲの一部までの学習期間は上の「初級段階」にほぼ相当する。

筆者らは立命館アジア太平洋大学の中国語初級学習者の発音状況を把握する目的で、2011年7月に中国語Ⅰの11人、中国語Ⅱの27人、中国語Ⅲの13人、合計62人の日本人学生を被験者に、ピンイン(中国語の発音表記法)の読み取り調査を行った。

調査項目は次のようにAとBの二部分からなっている。A部分は「a,o,e,i,u,ü」という6つの単母音にそれぞれ4つの種類の声調をかぶせて、全部で24パターンの単母音を作り、被験者に発音してもらう内容である。B部分は声調の組み合わせや声母、韻母の種類を全部網羅するために、次のような72の2音節語を調査項目に選んだ。調査単語の選出に当たり、いろいろな工夫をした。たとえば、中国語Ⅰの早い段階で学んでおり、授業中に頻繁に触れてきた単語を選ぶ一方、中国語Ⅲまで新出単語として教科書に一度も現れたことのない単語も選ぶことにした。こういった工夫をした理由は習熟の有無と正答率の関係を見る上で有効だと考えたからである。A部分とB部分はいずれも調査時、ランダムにピンインのみを被験者に見せながら、発音してもらう方法を取っている。

A：(単母音の読み取り)

ā ; á ; ǎ ; à ; ō ; ó ; ǒ ; ò ; ē ; é ; ě ; è ; yī ; yí ; yǐ ; yì ; wū ; wú ; wǔ ; wù ; yū ; yú ; yǔ ; yù

B：(二音節単語の読み取り)

zhōngguó (中国); chūnjié (春节); wēnnuǎn (温暖); jīchǎng (机场); shíjiān (时间); xióngmāo (熊猫); shítáng (食堂); huídá (回答); niúǎi (牛奶); míyǔ (谜语); chuántǒng (传统); xuéxiào (学校); ránhòu (然后); juéwàng (绝望); lǎoshī (老师); suǒ xīn (锁芯); wǎngqiú (网球); měiguó (美国); biǎoyáng (表扬); xuǎnzé (选择); yúsǎn (雨伞); yíngxiǎng (影响); liwù (礼物); fěnsuì (粉碎); fùxí (复习); qùnián (去年); yuǎnchéng (远程); kāfēi (咖啡); gōngsī (公司); fāshāo (发烧); cānguān (参观); gāoxìng (高兴); gōngzuò (工作); jīngguò (经过); miànbāo (面包); diànchē (电车); tuìxiū (退休); rènzhēn (认真); shàngkè (上课); àihào (爱好); xiūxi (休息); shāngliang (商量); yūnle (晕了); piányi (便宜); pútáo (葡萄); wǒmen (我们); nuǎnhuo (暖和); sǐle (死了); jiǎozi (饺子); dùzi (肚子); gùshi (故事); yòngle

(用了); róudào (柔道); lóudào (楼道); rìběn (日本); lìběn (立本); lán hòu (拦后); wūyún (乌云); qīnrè (亲热); nüèdài (虐待); shěnglüè (省略); lǜyè (绿叶); lǚxíng (旅行); nǚrén (女人); núli (奴隶); hècǎi (喝彩); gēge (哥哥); jiéhūn (结婚); pōdào (坡道); bānpèi (般配); bōtāo (波涛); pīpàn (批判)

この調査で得た音声データを分析し、その結果の一部をまとめたのがこの論文である。なお、データの使用については、被験者となった学生たちのインフォームド・コンセントを得ている。本論文の音声図形は音声分析ソフト Praat (ソフトの詳細については <http://www.praat.org> を参照されたい) で作成したものである。

中国語は1文字1音節である。中国語の音節 (Syllable) は「子音」(Initial)に相当する「声母」、「母音」(Vowel)に相当する「韻母」、「声調」(Tone) から構成されている (図1参照)。以下子音、母音、声調の順序で、学生の発音における問題点、難点及び対策について考察していく。

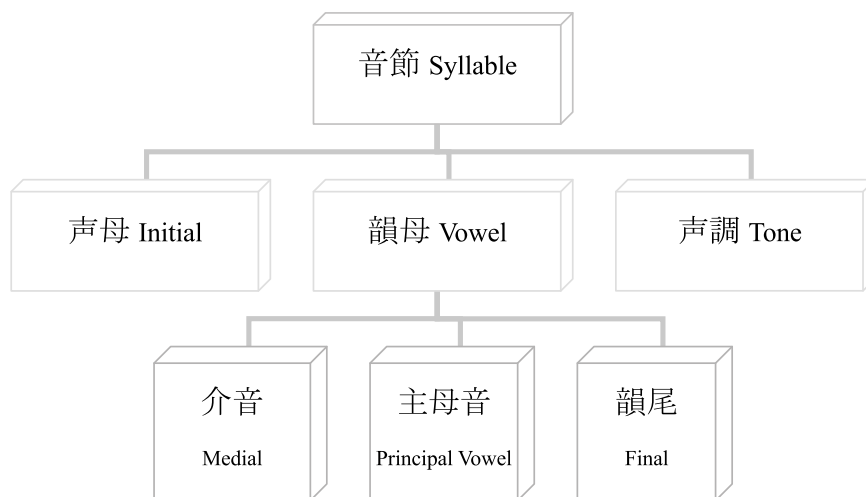


図1 中国語の音節構造

2. 子音の発音について

北京語の子音の音声体系をまとめると、図1のようになる (赵元任 1979:18 参照)。各欄の斜線の左はピンイン表記、右の括弧内は国際音声記号である。

表1 北京語の子音の音声体系

調音方法 調音位置	無気破裂音	有気破裂音	鼻音	摩擦音	有声持続音
唇音	b / [p]	p / [p ^h]	m / [m]	f / [f]	b / [p]
舌尖音	d / [t]	t / [t ^h]	n / [n]		l / [l]
舌尖後音	z / [ʈ]	c / [ʈ ^h]		s / [s]	
そり舌音	zh / [ʈʂ]	ch / [ʈʂ ^h]		sh / [ʃ]	r / [ʀ]
硬口蓋音	j / [tɕ]	q / [tɕ ^h]		x / [ç]	
軟口蓋音	g / [k]	k / [k ^h]		h / [x]	

初級段階の日本人学習者の子音発音について、そり舌音の発音問題や唇歯音[f]、声門摩擦音[x]の発音などの難点は

これまで繰り返し指摘されており、今回の調査においても観察することができた。以下では調音方法 (manner of articulation) の問題点に絞って考察していく。

無気音と有気音の区別が日本人中国語学習者にとって大きな難点だとよく言われる。なぜなら、無気音と有気音の区別は中国語と日本語における重要度が異なっているからである。具体的に言うと、中国語では無気音と有気音が有意味の対立を成している。すなわち、両者が弁別的な特徴を持っているということである。たとえば、

{ [pau²¹⁴] (飽) } { [tuei⁵¹] (对) } { [kəu²¹⁴] (狗) } { [tci⁵⁵] (鸡) } { [tʂl⁵⁵] (知) } { [ts⁵¹] (自) }
 { [pʰau²¹⁴] (跑) } { [tʰuei⁵¹] (退) } { [kʰəu²¹⁴] (口) } { [tʂʰ⁵⁵] (七) } { [tʂʰ⁵⁵] (吃) } { [tsʰ⁵¹] (次) }

これに対し、日本語においては、無気音と有気音は意味を区別するのに役立っていないが、一方、無声音と有声音の対立が重要である。齊藤 (1997) は次のように述べている。

たとえば、「[kʰa] がいる！」というように有気音で言った場合も、「[ka] がいる！」と無気音で言った場合も、日本語では同じ意味、すなわち、「蚊がいる」を表す。しかし、有声音を用いて「[ga] がいる！」と言うと「蛾」のことになってしまう。中国語では [kʰou] と言うか [kou] と言うかでは意味が異なり、前者は「口」、後者は「イヌ」を表す。ところが、無声無気音で [kou] と言っても有声音で [gou] と発音しても意味は変わらず、「イヌ」と理解される。つまり、音声としては異なる [kʰ] [k] [g] の3音も日本語と中国語とでは使われ方が違うのである。日本語では [kʰ] と [k] の違いは意味の区別に役立たず、中国語では [k] と [g] の違いは重要ではない。

日本語と中国語における無気音と有気音、無声音と有声音の音韻対立の有無をまとめると、表2のとおりである。

表2 日中両語における無気音と有気音、無声音と有声音の音韻対立

	無声無気音と無声有気音の音韻対立	無声音と有声音の音韻対立
日本語	×	○
中国語	○	×

今回の調査では、被験者の調音方法の問題について次の2点が挙げられる。

- (1) 有気音の発音方法を習得できず、無気音に誤って発音する

図2、図3はそれぞれ学生A、Bによる軟口蓋・破裂・有気子音[kʰ]をもつ音節[kʰa⁵⁵] (“咖”)の発音である。学生Aの発音は正確であり、左の図形の示すように声道閉鎖の開放時から声帯の振動開始時間(母音[a]を発音する時間)まで是不規則気流が一定の時間にわたって観察されている。一方、学生Bは有気音[kʰ]を無気音[k]に間違えたため、右の図形の示すように、閉鎖の開放時から母音[a]を発音するまでの時間間隔が僅かであった。

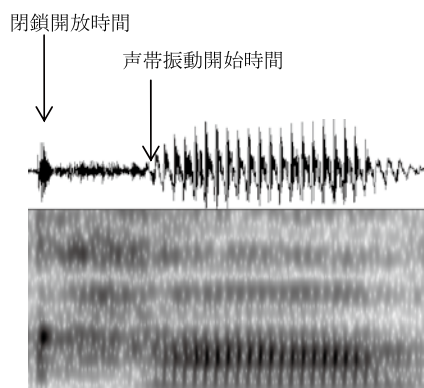


図2 学生Aの発音: [kʰa⁵⁵]

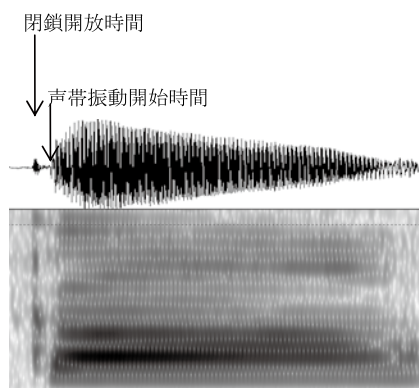


図3 学生Bの発音: [ka⁵⁵]

図4、図5は学生A、Bによる両唇・破裂・有気子音[pʰ]をもつ音節[pʰei⁵¹] (“配”)の発音である。学生Aの発音は正確であるが、学生Bは有気音[pʰ]を無気音[p]に間違えて発音している。

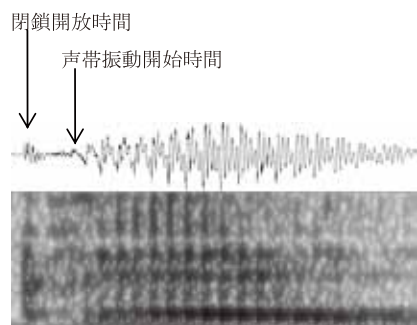


図4 学生Aの発音：[pʰei⁵¹]

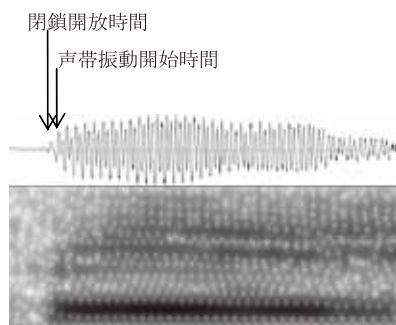


図5 学生Bの発音：[pei⁵¹]

図6、図7は学生A、Bによる歯茎・破裂・有気子音[tʰ]をもつ音節[tʰaŋ³⁵] (“堂”)の発音である。学生Aの発音は正確であるが、学生Bは有気音[tʰ]を無気音[t]に間違えて発音している。

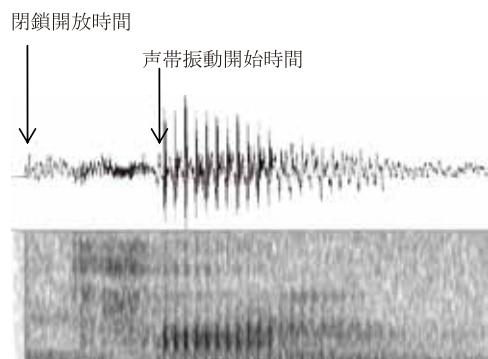


図6 学生Aの発音：[tʰaŋ³⁵]

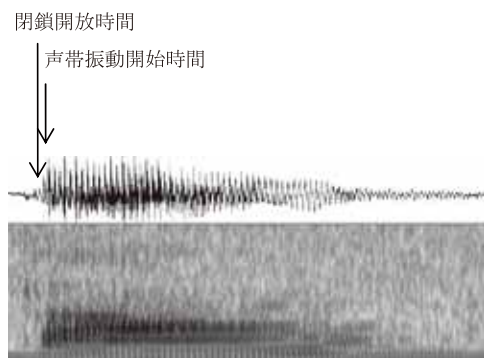


図7 学生Bの発音：[taŋ³⁵]

日本人学習者の有気音の習得は従来大きな難関として注目され、たくさんの改善策が提言されている。それらに基づき中国語教員が重点的に教育努力を傾けてきた成果であろう、APU 学生の習得状況については、中国語Ⅰ、中国語Ⅱ、中国語Ⅲの順に習得率が高くなっていくという良好な傾向が観察された。中国語Ⅲの履修生はほぼ全員が有気音を発音できるようになっていた。

(2) 無声無気音を有声無気音で代用する

一部の学生は有気の調音方法を習得しているが、一方、無声無気音を正確に発音することができない。無声無気音の代替に有声無気音を発音する。たとえば、図8、図9は歯茎・破裂・無気子音[t]を持つ音節[tau⁵¹] (“道”)を発音した二人の学生の音声である。図8は[t]が正確に発音されたことを示すものである。一方、図9は無気音の[t]が有声音の[d]に発音されたことを示すものである。後者では、有声音を示すボイスパーが閉鎖の開放直前に観察されている。

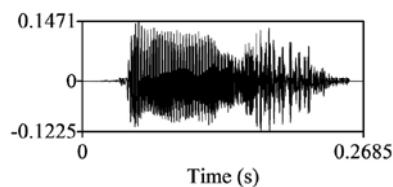


図8 学生Cの発音:[tau⁵¹]

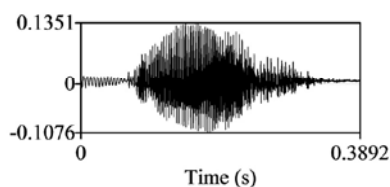
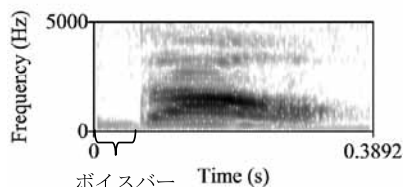
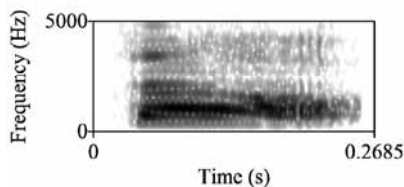


図9 学生Dの発音:[dau⁵¹]



同様に、図10、図11は歯茎・破裂・無気音[p]を持つ音節[po⁵⁵]（“波”）を発音した二人の学生の音声である。図10は[p]を正確に発音したものである。一方、図11は[p]が有声音の[b]に発音されたことを示すものである。このような無気音子が無声音子音（濁音）に発音される現象について、杉村ほか（2010）は次のように述べている。

無気音、特に[d][j][z]などは、日本人の耳には濁音に聞こえることがある。実際は濁音ではないが、習熟するまでは、喉の緊張した濁音という理解で構わない。

今回調査したところ、中国語Ⅲ履修生の発音においてもこういったエラーがなお多く見られる。したがって、中級段階に入る前に、この問題点に力を入れて発音の矯正を行うべきと考える。

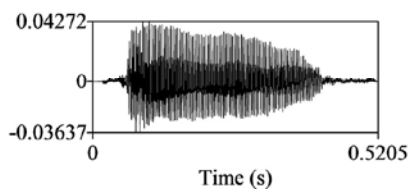


図10 学生Cの発音:[po⁵⁵]

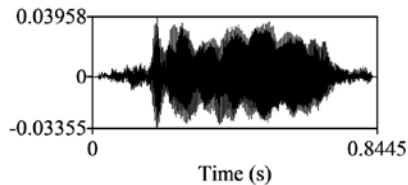
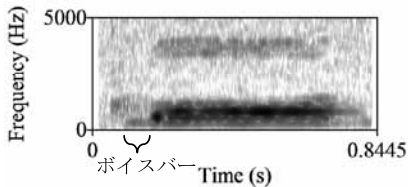
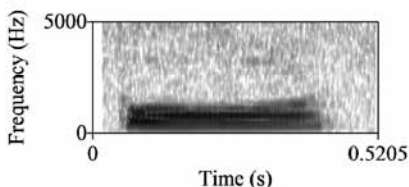


図11 学生Dの発音:[bo⁵⁵]



3. 母音の発音について

北京語の母音の音声体系をまとめると、表3のようになる（赵元任 1979:20 参照）。各欄の上行はピンインであり、下行

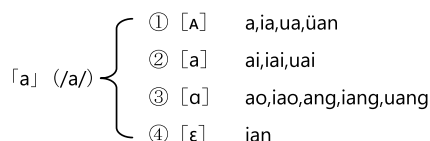
は国際音声記号である。

表3 北京語の母音の音声体系

韻尾 介音	韻尾なし	-i	-o/-u	-n	-ng	-r
介音なし	i a e [z, ʝ] [A] [ɤ]	ai ei [ai] [ei]	ao ou [au] [ou]	an en [an] [ən]	ang eng ong [aŋ] [ɛŋ] [oŋ]	er [ɛr]
-i-	i ia ie [i] [ia] [ie]		iao iou [iao] [iou]	ian in [iən] [in]	iang ing iong [iaŋ] [iŋ] [ioŋ]	
-u-	u ua uo [u] [uA] [uɔ]	uai uei [uai] [uei]		uan uen [uan] [uən]	uang ueng [uaŋ] [uɛŋ]	[uɚŋ]
-ü-	ü üe [y] [yɛ]			üan ün [yan] [yn]		

(1) ピンイン表記に起因する発音のエラー

一部のエラーはピンインの綴り方に対する理解不足に起因すると思われる。中国語のピンインの綴り方は音声学と音韻論の妥協的な結果と言われている。表3に示したように、ピンインで「a」に表記される音声は実際、4種類がある。この4つの音声は同じ音声的環境で弁別対立をなさず、同じ音素/a/の条件異音（位置異音）と見なされるため、一つの綴り方（「a」）だけが用いられるのである。



今回の調査結果における母音の発音エラーの多くは「ian」が「ian」に発音されるケースである。このような発音の問題に対し、次のような2つの対策が考えられる。一つは、「ian」の「a」が日本語のエ ([ɛ]) の音声に近いので、「iaɛn」のように「a」の右下に小さい日本語の仮名エをつけて、この「a」の発音の特殊性を強調するという方法である。もう一つは、[ɛ] と [ɑ] の差異が韻尾 [n]、[ŋ] の影響によるものなので、[ɛ] の音声になるために、[a] の発音を始めた途端に、舌尖を上歯茎の辺りにくっつけながら、[n] の発音をするという方法である。

このようなピンインの綴り方に関わる問題は「a」のほか、「ü」 ([y]) の綴り方や、三重母音「uei」 ([uei])、「iou」 ([iou]) の発音エラーにも観察されている。

まず、前者について述べる。表記上の便宜のために、「ü」 ([y]) は子音「j」 ([tɕ])、「q」 ([tɕʰ])、「x」 ([ç]) と結合する場合や無子音音節を成す場合、上の点をつけず、「u」と綴るという表記の規則がある。「ju」、「qu」、「xu」、「yu」のような単母音の「u」も、「jue」、「que」、「xue」、「yue」、「juan」、「quan」、「xuan」、「yuan」のような多重母音における「u」も、[y] と発音されるべきである。このような綴り方の規則は、入門段階で練習が繰り返して行われてきたため、今回調査したところ、「j」、「q」、「x」、「y」と結合する「u」の発音は殆ど正確に [y] と発音されたが、一方、本来 [u] と発音されるべき「u」、すなわち、子音「n」、「l」と結合する「u」は、[y] に発音されるエラーが予想以上に多かった。たとえば、「nuǎn」を「nyen²¹⁴」に誤って発音した学生は9割以上を占めている。

次に、三重母音「uei」、「iou」の綴り方に関わる問題点について述べる。この2つは実際の発音がいずれも「介音+二重母音」の構造、すなわち、「u」+「ei」、「i」+「ou」となっている。子音を前につける場合、表記規則としてそれぞれ「ui, iu」と書き換えられるが、発音は三重母音のままではなければならない。今回の調査では、ピンイン表記の通り

に [ui]、[iu] と発音されたエラーが多く観察された。この問題点の一つの対策として、「ui」、「iu」をそれぞれ「uei」、「iou」のように実際の音声に還元して練習させる方法が有効だと考える。このように介音を小さめに書き、主母音を大きめに書く工夫をすれば、視覚上の刺激を与えることができる。

(2) 鼻音韻尾をもつ音節の発音

中国語は音節言語であるのに対し、日本語（東京方言）はモーラ言語である。表4に示すように、モーラ言語の日本語においては、撥音や促音が単独で分節の単位として成り立つ。一方、中国語においては鼻音韻尾が前の主母音と同じ音節に含まれる（音節とモーラの関係は窪菌 1999 参照）。

表4 モーラ言語と音節言語の相違

モーラ言語 (ex. 日本語東京方言)	音節言語 (ex. 中国語)
CV=1 モーラ (ex. se せ)	CV=1 モーラ (ex. ba 八)
CVC=2 モーラ (ex. sen せん)	CVC=1 モーラ (ex. bān 班)
CVV=2 モーラ (ex. sei せい)	CVV=1 モーラ (ex. bāo 包)

このような分節方法の相違の影響により、多くの日本人中国語学習者の発音には主母音と鼻音韻尾を別の音節に分けて発音するエラーがある。図12、図13は二人の学生による「食堂」([ʃl³⁵ tʰɑŋ³⁵])の発音のピッチ曲線である。左図は正確な発音を示すものであり、声調が[tʰɑŋ³⁵]の韻母全体([ɑŋ])にかかっている。一方、右図は[tʰɑŋ³⁵]を「[tʰɑ] + [ŋ]」のような2モーラに分けて発音した音声である。鼻音 [ŋ] にかかっているピッチ曲線と [ɑ] の部分にかかっている曲線が切れた状態となっている。

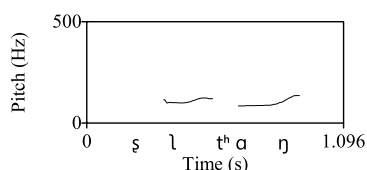


図12 学生Eの発音

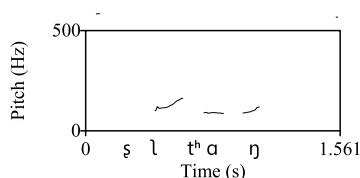


図13 学生Fの発音

4. 声調の発音について

4.1 単字音の声調について

中国語（北京語）の声調(Tone)には4つのパターンがある。「五度表記法」を用いて表示すると、[55:], [35:], [214:], [51:]というような調値になる（図14参照）。それぞれ第一声、第二声、第三声、第四声と呼ばれる。

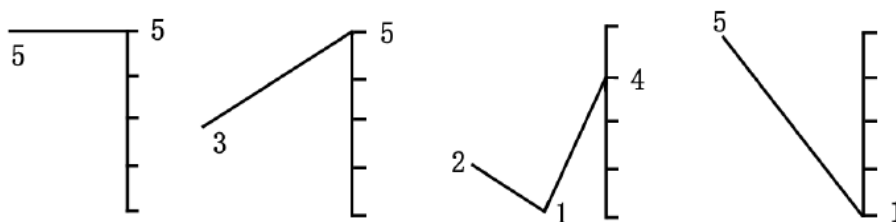


図14 中国語の四声（翟时雨 2003 より引用）

前述したように、声調に関しては次の2つの調査項目が用意された。一つは「a,o,e,i,u,ü」という6つの単母音にそれぞれ4種類の声調をかぶせて、全部で24パターンを被験者に発音してもらった調査である。もう一つは72の2音節語を

読み取る調査である。

まず、単母音声調の発音の正答率をまとめると、次表のようになる (括弧の中は各声調や各単母音の平均正答率)。

表5 単母音声調の読み取りの正答率

声調 単母音	第一声 (90%)	第二声 (95%)	第三声 (38%)	第四声 (82%)
a (85%)	100%	100%	46%	92%
o (87%)	100%	92%	62%	92%
e (71%)	92%	92%	38%	62%
i (81%)	85%	92%	46%	100%
u (71%)	92%	92%	8%	92%
ü (63%)	69%	100%	31%	54%

各単母音の平均正答率が高いほうから $o > a > i > e, u > ü$ の順になっている。各声調の平均正答率を比べて見ると、高いほうから第二声 > 第一声 > 第四声 > 第三声の順となっている。このうち、第二声の正答率が最も高いのに対し、第三声の正答率が最も低い。第三声のエラーの多くは「上昇調」、すなわち第2声と同じような調子で発音されることである。図15、図16は第二声と第三声が正確に発音されたピッチ曲線である。一方、図18、図20はいずれも第三声が「上昇調」に発音されたピッチ曲線であり、どちらも左の第二声(図17、図19)との区別がつかない。第三声のピンイン表記は「ㄨ」となっており、聴覚上も「下降→上昇」のパターンである。ところが、発音のコツは声を上昇させず、低く抑えることである。その「上昇」の調子が聞こえるのは「喉の緊張を解いてやると、おさえられていた息が一気に出るとともに、音の高さも自然に上がり…」(相原ほか2003)」ということに起因すると考えられる。

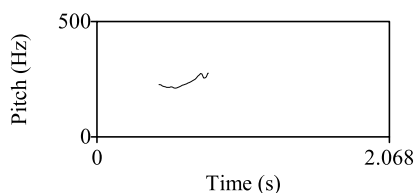


図15: 学生G [a³⁵]の発音

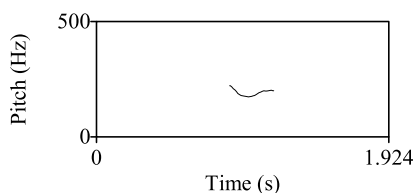


図16: 学生G [a²¹⁴]の発音

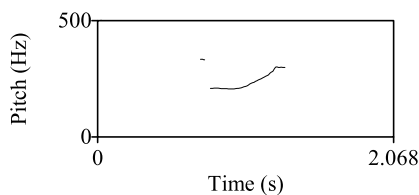


図17: 学生H [i³⁵]の発音

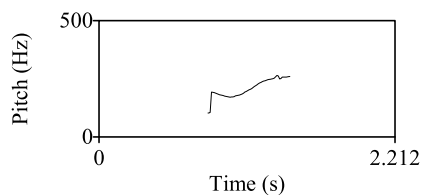


図18: 学生H [i²¹⁴]の発音

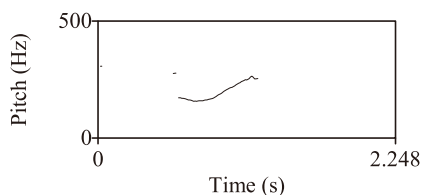


図 19 : 学生 H [a³⁵] の発音

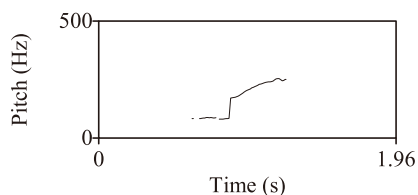


図 20 : 学生 H [a²¹⁴] の発音

実際の教育現場では、四声について「上げる」、「下げる」のような特徴だけでなく、下図のように強弱（力の入れどころと抜きどころ）や長さなどの特徴をも教えるべきだと考える。

表 6 中国語声調の特徴

声調 特徴	第一声	第二声	第三声	第四声
上げ下げ	高く、平ら	上昇する	低く、平ら	下降する
強弱	同じ強さ	弱 → 強	強 → 弱	強 → 弱
長さ	長い	短い	長い	短い

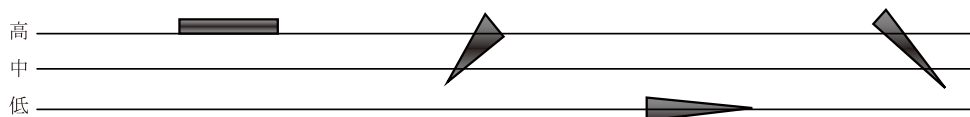


図 21 四声の図式

ところで、単母音の声調の正答率が高いのに対し、2音節語の声調は正答率が低い。たとえば、第2声は単母音の場合、正答率が最も高いが（表5参照）、一方、2音節語に置かれると正答率が大幅に下がって最も低い数値になる（表8参照）。このように、1音節の発音は正確にできるようになっても、2音節以上の語になると発音が不安定になる。現代中国語の語彙は2音節語が大部分を占めている（菊田1967）という実態があり、2音節語の発音練習は単音節に比べ重要度がさらに高いといえる。次節では、2音節語の声調の発音における問題点を考察する。

4.2 2音節語の声調について

まず、ここで調査項目である72の2音節語を声調の組み合わせのパターンに分けて、次のようにまとめる。

表7 調査用の2音節語

第2字 第1字	第一声	第二声	第三声	第四声	轻声
第一声	kāfēi 咖啡; bōtāo 波涛; gōngsī 公司; fāshāo 发烧; cānguān 参观; bōtāo 波涛	zhōngguó 中国; chūnjié 春节; wūyún 乌云	jīchǎng 机场; wēnnuǎn 温暖	gāoxìng 高兴; pōdào 坡道; bānpèi 般配; pīpàn 批判; gōngzuò 工作; jīngguò 经过; qīnrè 亲热	xiūxi 休息; shāngliang 商量; yūnle 晕了; gēge 哥哥
第二声	shíjiān 时间; xióngmāo 熊猫; jiéhūn 结婚	shítáng 食堂; huídá 回答	niúǎi 牛奶; míyǔ 谜语; chuántǒng 传统	xuéxiào 学校; lóudào 楼道; róudoào 柔道; ánhòu 然后; núli 奴隶; juéwàng 绝望	piányi 便宜; pútao 葡萄
第三声	lǎoshī 老师; suǒ xīn 锁芯	wǎngqiú 网球; xuǎnzé 选择; yuǎnchéng 远程; měiguó 美国; biǎoyáng 表扬; lǚxíng 旅行; nǚrén 女人	yǔsǎn 雨伞; yǐngxiǎng 影响	lǐwù 礼物; shěnglüè 省略; fěnsuì 粉碎	wǒmen 我们; sǐle 死了; jiǎozǐ 饺子; nuǎnhuo 暖和
第四声	miànbāo 面包; rènzhēn 认真; diànchē 电车; tuìxiū 退休	fùxí 复习; qùnián 去年	rìběn 日本; lìběn 立本; hècǎi 喝彩	shàngkè 上课; nüèdài 虐待; àihào 爱好; lǜyè 绿叶	dùzi 肚子; gùshi 故事; yòngle 用了; dùzi 肚子

今回の調査で得られた声調の各組み合わせの正答率をまとめると、表8のようになる。

表8 2音節語の声調と正答率

第2字 第1字	第一声 (81%)	第二声 (50%)	第三声 (60%)	第四声 (81%)	轻声 (64%)
第一声 (79%)	86%	70%	53%	90%	71%
第二声 (75%)	76%	64%	65%	83%	72%
第三声 (64%)	67%	29%	72%	46%	36%
第四声 (80%)	88%	81%	52%	88%	87%

第二声と第三声を含む声調の組み合わせは日本人にはむずかしいと言われる(郭春貴 2004)。今回の調査結果を分析したところ、第二声もしくは第三声で始まる/終わる2音節語の声調の正答率が非常に低い。中でも、「第三声+第二声」の組み合わせの正答率が最も低いことが分かった。第二声は先述したように、単母音の場合では高い正答率を誇っているが、一方、「第三声+第二声」、「第二声+第二声」のような組み合わせにおいては正答率が大幅に下がってくる(表8参照)。ここでは、この2つの組み合わせの発音エラーについて詳しく考察する。

まず、「第三声+第二声」の組み合わせでは、被験者の発音エラーは第1音節(第三声)の声調に集中している。第三声は単音節の場合、調値が[214:]となっているが、一方、その後ろに他の音節が来る2音節語の場合には調値が[21:]、いわゆる「半三声」となる。この「半三声」を発音するコツは声を低く抑えることである。「第三声+第二声」では、声を低く抑えた後、すぐに第2音節の高い上昇調[35:]を発音する。このように前後2音節の高さの差があまりにも大きいので、学生にとって難しい発音となる。図22は学生Iが「第三声+第二声」の「wǎng qiú」(“网球”)を正確に発音したことを示すピッチ曲線である。一方、図23~図27はいずれも学生Jが同単語第1音節の「半三声」を正確に発音できず、第二声のような上昇調に発音してしまったことを示すピッチ曲線である。

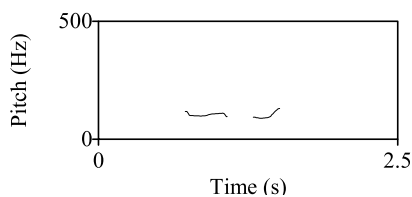


図22：学生I「wǎng qiú」の発音

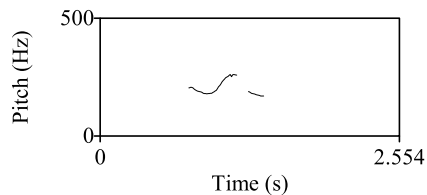


図23：学生J「wǎng qiú」の発音

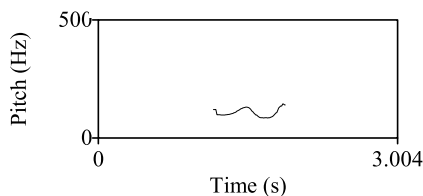


図24：学生J「biǎo yáng」の発音

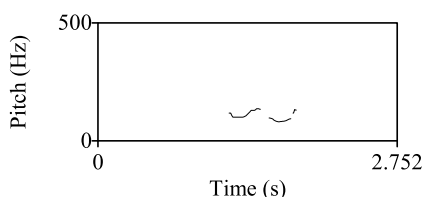


図25：学生J「měi guó」の発音

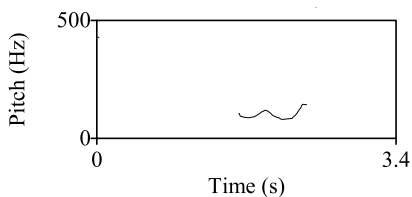


図26：学生J「nǚ rén」の発音

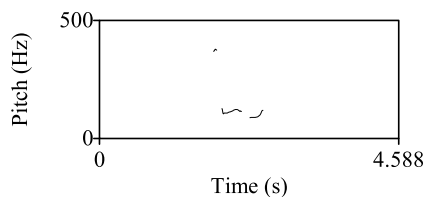


図27：学生J「xuǎn zé」の発音

次に、「第二声+第二声」の組み合わせについては、被験者のエラーは第2音節に集中している。上昇すべき声調がうまく上昇できず、下降調になってしまうエラーのパターンが多く観察される。たとえば、図28と図29はそれぞれ二人の学生による「shí táng」“食堂”の発音を示すものである。図28は2つの上昇調を正確に発音しているピッチ曲線であるが、一方、図29は第1音節を上昇調に、第2音節を下降調に発音していることを示すピッチ曲線である。

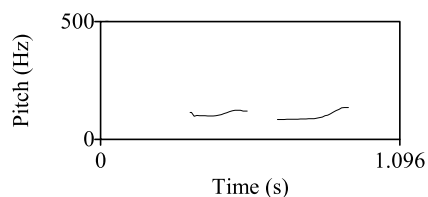


図 28 学生 E 「shí táng」の発音

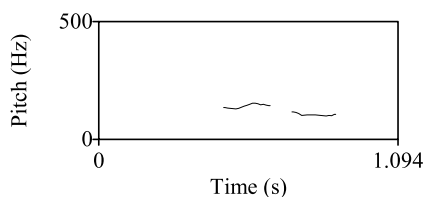


図 29 学生 J 「shí táng」の発音

最後に、軽声の発音の問題について考察する。軽声は単語や文の最後にしか現れず、軽く、短く発音する。以下の 4 つの図は筆者の一人が発音した軽声を持つ二音節単語のピッチ曲線を示すものである。図 30～図 33 に示すように、軽声は一定の高さを持っており、その高さは前に来る音節のパターンによって変わる。第三声の後だけは高くなり、その他の声調の後には低く発音する。

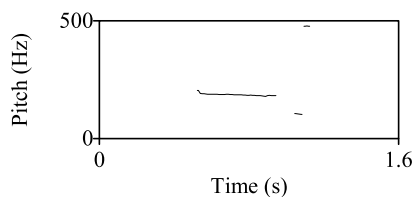


図 30 「shā zi」の発音

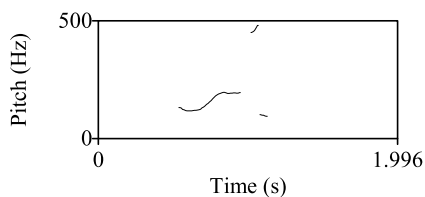


図 31 「shí zi」の発音

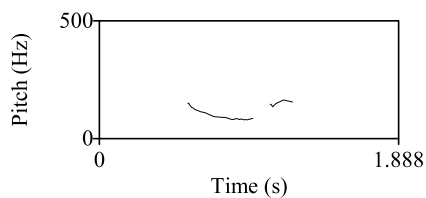


図 32 「chān zi」の発音

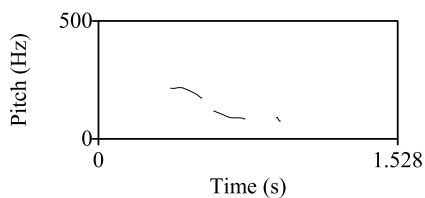


図 33 「zhào zi」の発音

四声と軽声の組み合わせの中では、「第三声+軽声」の正答率が最も低い。「第三声+軽声」のエラーは殆ど、第 1 音節が上昇した調子で発音されるというパターンである。図 34 は「jiào zi」を正確に発音したことを示すピッチ曲線である。図 35 は半三声として下がるべき第 1 音節が上昇の調子になったことを示している。

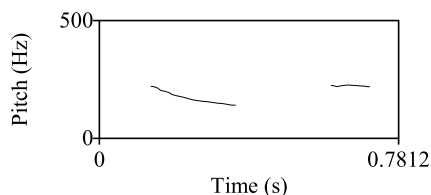


図 34 学生 K 「jiào zi」の発音

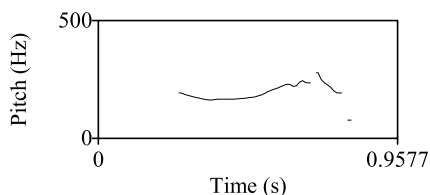


図 35 学生 L 「jiào zi」の発音

発音教育の現場ではこのような軽声の高さのイメージを早く覚えさせるために、以下のような図式を提示しておくこ

とが有効だと考える。

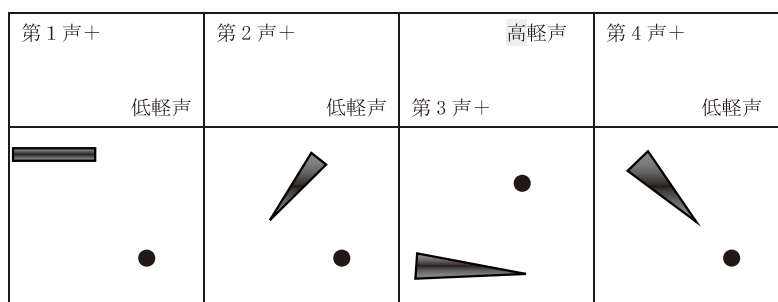


図 36 軽声をもつ 2 音節語の声調の図式

最後に、中国語 I、II、III の被験者の 2 音節語声調の発音状況を比較してみよう。表 9 には学習の段階と各組み合わせの発音の正答率を示している（一番下の行は学習段階）。この表を通して学習時間数が長いほど、発音の正答率が高くなるという当然の傾向が確認されたが、「第一声+第三声」の習得における進歩の度合いが非常に大きいことも観察された。一方、「第三声+第二声」、「第三声+第四声」、「第三声+軽声」が中国語 III になっても低い正答率に止まっていることは注意すべきである。

表 9 2 音節語の各声調の組み合わせの正答率（各欄数字の単位は%）

第 2 字 第 1 字	第一声			第二声			第三声			第四声			軽声		
	第一声	70	87	100	61	72	78	8	50	100	79	93	98	44	67
第二声	44	89	94	42	83	67	50	72	72	79	81	93	67	67	83
第三声	25	83	92	7	36	43	58	58	100	22	67	50	17	33	58
第四声	63	96	100	58	92	92	33	39	83	67	96	100	79	88	96
学習段階	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III

6. おわりに

以上、日本人学習者の発音の特徴を分析した。立命館アジア太平洋大学では現在、日本人学生のほかに、多くの留学生が中国語を履修している。数カ国の学生が同じクラスで中国語を学習している教室風景は APU においてはごく自然なものである。ところが、学生の母語が違えば、発音の難点も当然異なってくる。たとえば、破擦音と摩擦音の区別、すなわち、q ([tʃʰ]) と x ([ç])、ch ([tʃʰ]) と sh ([ʃ]) のような区別はタイの学生にとっては難しいようであるが、日本人学習者はこれをさほど苦にしていらないように思われる。発音の難点がさまざまである学生群に如何にしてより効率的な指導方法を提供できるのか。このような問題は今後の課題にしたい。

参考文献

- 相原茂・木村英樹・杉村博文・中川正之（2003）『新版 中国語入門 Q&A101』大修館書店
 牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編（1967）『中国文化叢書 1 言語』大修館書店
 菊田正信（1967）「現代語の音韻」, 牛島徳次ほか編『中国文化叢書 1 言語 II-4』
 郭春貴（1994）『日本人のための中国語発音の特訓』白帝社
 窪蘭晴夫（1999）『日本語の音声』岩波書店

- 吴宗济主编 (1992) 『现代汉语语音概要』 华语教学出版社出版
- 齐藤純男 (1997) 『日本語音声学入門』 三省堂
- 杉村博文・郭修静 (2010) 『大阪大学世界言語研究センター 世界の言語シリーズ2 中国語』 大阪大学出版会
- 翟时雨 (2003) 『汉语方言学』 西南师范大学出版社
- 日本中国語教育学会 (2007) 「中国語初級段階学習指導ガイドライン」 中国語教育学会学力基準プロジェクト委員会
- 赵元任 (1979) 『汉语口语语法』 商务印书馆
- 罗常培・王均 (2002) 『普通语音学纲要 (修订版)』 商务印书馆